

profile

Tamia Triandini
タミア・トリアンディニ ●1990(平成2)年生まれ、インドネシア出身。母国の大学で地質工学を学び、2012年来日。大学院では日本語の勉強をしながら、地盤に関する研究を行う。修了後は引き続き施工技術を学ぶべく、日本で働くことを選択し、2015年、西松建設(株)に入社。入社以来、横浜湘南道路工事事務所で現場監督として活躍中。



現場は地下40m。日々のコミュニケーションを大切にしている。

「大学では地質工学を学んでいたのですが、勉強していくうちに日本とインドネシアの地盤はそれほど変わらないと知りました。なのに道

路を比べると、日本のように舗装されておらず穴が空いているようなところもあるんです」知識を深めていくほど日本の技術を学びたいという想いが大きくなっていき、日本の大学院に行くことを決意した。「日本に来てインフラを見てみると、軟弱な地盤でも電装や配水がすべて地中化されていることが不思議でした。どうやって実現しているのかとても気になったんです」こうして、シールドマシンによる工事技術を手に入れた。母国にトンネルをつくるという明確な目標がタミアのなかで生まれた。

ギャップの連続

シールド工事の現場で働きたいと就職活動の面接時から会社に伝えていたタミアが、入社後に配属されたのは横浜湘南道路工事。シールドマシンによるトンネル掘削を行う現場だ。トンネル技術を学べると意気込んだタミアだったが、彼女にとっての不安要素はいくつもあった。「まず全くわからない専門用語と毎日向き合

母国をよくするには 母国の技術だけでは足りない

インドネシアと日本の共通点。それは、山岳地帯の割合が高いことと車社会ということだ。インドネシアでは山間を縫うように車がう回して走る。日本ではトンネルによって、山間部であっても直線的な道路網が整備されている。タミアが住んでいた地域にもトンネルはなく、家から空港までは山麓をまわるような道をバスで六時間。さすがに遠すぎる距離だ。

「山岳トンネルや橋梁がなんでないんだろう？ 技術がないなら私が学んでつくりよう」と思ったんです。それが始まりでした」

タミアが日本のインフラを知ったのは、アニメや漫画に出てきた構造物。なかでも地元の島では馴染みのなかった高速道路が印象に残り、自分の目で見たいと思っていただけだという。

インドネシアのインフラをよりよくするため、先端技術を習得したいと日本に単身飛び込んだ小町の名は、タミア・トリアンディニさん。強い信念を胸に秘め、建設業における母国と日本のギャップを乗り越えながら、シールド工法の会得を目指して日々励んでいる。

「日本に来てインフラを見てみると、軟弱な地盤でも電装や配水がすべて地中化されていることが不思議でした。どうやって実現しているのかとても気になったんです」

こうして、シールドマシンによる工事技術を手に入れた。母国にトンネルをつくるという明確な目標がタミアのなかで生まれた。

輝け! けんせつ小町

現場監督

タミア・トリアンディニ

西松・戸田・奥村特定建設工事共同企業体 横浜湘南道路工事事務所



「けんせつ小町」は、日建連が定めた建設業で活躍する女性の愛称です。

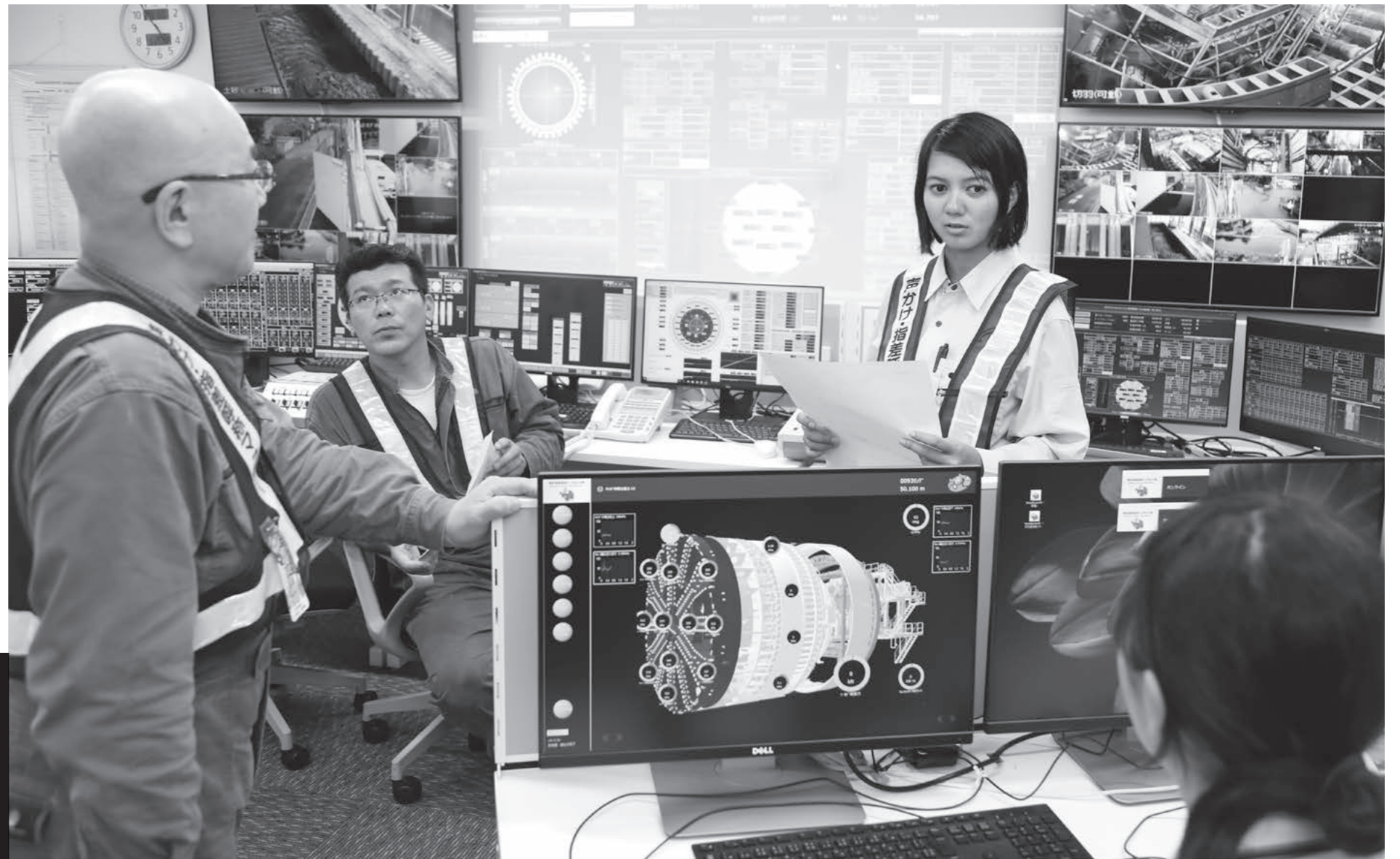
my Beginning

日本の技術で、母国にトンネルを

私が建設業界に入った理由



右/後輩へ指導するときは、表面的な理解で終わらないよう、「本当にわかった?」と自分から聞くことを忘れない。
上/目的意識の高いタミア。仕事に関する細やかな確認と調整は欠かさない。



「タミアがいると現場が明るい」と言われるほどで、真剣な打ち合わせも雰囲気は和やかだ。

my Growing 私が建設業界で学んだこと

目的意識と時間厳守

コミュニケーションが何より大切だとされる工事現場において、不慣れた日本語を使わなければならぬことが最初の壁となった。
また、女性職員が少なかったことや建設業の業務内容そのものについてもギャップがあった驚いたとも言える。

「母国に比べて、この業界で働く女性の割合が日本では少ないことに驚きました」

インドネシアでは、就職後二年間は結婚ができないなどの制約を課す会社もあるが、それでも女性が三割ほどの割合を占めているという。「不安がなかったわけではありませんが、好きにやってみようと思えたとし、意思を尊重してもらえ環境だということも感じていました。また、日本の建設業では一から十まで全部できないといけないことも衝撃的でした」

安全管理なら安全管理、施工管理なら施工管理のみと担当業務以外のことはやらない分業制がインドネシアの基本スタイル。国の違いで仕組みがこんなにも大きく異なるとは思っておらず、面食らったという。

目的と時間を定めて突き進む

今年で入社四年目となり、仕事にも慣れてきて二名の後輩を持つまでになったタミア。上司である坪井所長からは「工事の基礎が一通りわかり、後輩の指導も行えるようになった。今後は技術に関してより深く理解し、彼女なりの強

みをもって、更に高いところを目指していったほしい」との評価。そんなタミアだが、働いていくなかでインドネシアと日本では仕事に対する向き合い方が大きく違うと話してくれた。「インドネシアには残業という概念がなく、定時で帰る習慣があります。日本では仕事が終わらない時は残業も仕方がないと考えたりもしますが、私はプライベートも大切にしたいのでスケジュール管理をしっかりしています」

タミアは一年目から自分でタイムマネジメントを行い、優先順位を明確にし退社時間を決めて仕事を終える。入社年次や経験値ではなく、インドネシアの働き方を知るタミアだからこそ習慣化できていることだ。

「産休制度などが整っていたり、結婚してもキャリアプランが白紙にならないことは母国と違ってとても嬉しいです。また、『間違ふことがあってもいい、思い切り仕事をしなさい。間違ひは、先輩がカバーするもの』とアドバイスをしてくださった先輩がいました。当時も今の私も、自分がやってみようと思うことを信じて、先輩のフォローのもとどんなことにもチャレンジできるのだと感じますね」

会社の制度や一緒に働く仲間の支えがあるから、この先のキャリアを自由に思い描くことができる、笑顔でタミアは話してくれた。

学んだ技術を、様々な場所に



女子休憩室は明るく落ち着いた雰囲気。ここをつくる際に真っ先に意見を求められたのはタミアだった。広くて使いやすい洗面所や化粧台、畳でくつろげるスペースなどを設置した空間は、居心地がよいので自然と社員同士の交流も生まれる。

my style

ドライブ、アウトレットで買い物、ゲーム、海外旅行。休みの過ごし方は様々で、いろんなことを体験したいと思っています。最近一番楽しいのは、なんといっても登山。道とは思えないようなところも、探りながら登っていくのが楽しいですね。特に好きなのは富士山！先日も行ってきて、頂上で写真を撮ってきました。



富士山を登頂した際の1枚。頂上からは水平線まで続く雲海を眺めることができました。

「今後は、設計に関してもっと勉強していきたいです。それから、海外での仕事はやはり強く望んでいますね」と言うタミア。
 「先日シンガポールの現場見学に行かせてもらいました。海外でどんな工事をしているか、どんな技術が採用されているかをもっと追究していきたいです。それを日本で生かしていくことも興味があるし、日本で学んだことを海外に持っていきたいという気持ちもあります」
 母国をより住みやすい環境にしたい。幼い頃に抱いた想いを実現するため、着々と前に進むタミア。インドネシアの交通はこれから大きな発展を遂げていく。その先頭を切るのは日本で得た知識・経験を武器にした彼女かもしれない。

my **Growing** 私が建設業界で学んだこと